

(添付資料1)

最優秀賞
文部科学大臣奨励賞



じっちゃんの紙飛行機
青森県むつ市立大平中学校
三年 秋 本 日向子

ランドセルを片づけ、晩ご飯を食べていると母が、「じっちゃんのところへ行こうか」と言った。じっちゃんは私のひいおじいちゃんだ。九十七歳だけれどパソコンを使って将棋もやるし、おもしろそうな番組があれば予約録画もするスーパーおじいちゃんだ。私はじっちゃんが大好きだったので、「うん、行く!」と二つ返事で答えた。そして、いつも持っていくお菓子を買ってじっちゃんの家に行った。

母の実家に着くと、真っ先にじっちゃんの部屋に行った。じっちゃんは外国のドラマを観ていた。じっちゃんの部屋はいつも暖かくて、干したてのふとんのような匂いがした。私が「じっちゃん、来たよ」と言っても、じっちゃんは振り向いてくれない。小学生だった私の小さな声では、じっちゃんの耳に届かないのだ。母がじっちゃんの肩を叩くと、すぐに私を見つけ、にっこりと笑ってくれた。母はじっちゃんの顔を見ると、たちまち笑顔になる。こんなときに、じっちゃんもおばあちゃんも母も私も、みんな親子だと感じる。

じっちゃんは「学校はどうだ、楽しいか?」と聞いてきた。私は、「うん、楽しいよ」と答えた。それから、「今、社会で戦争のことを勉強しているんだけど、じっちゃんは分かる?」と聞いた。じっちゃんは昔、飛行機の整備士だったのだ。手先が器用なじっちゃんには、ぴったりだと思う。社会の宿題で、戦争のことを調べてくるように言われていたので、じっちゃんに聞けば、きっと良い答えが返ってくるだろうと思っていた。でも、じっちゃんは、何も教えてくれなかった。にっこり笑ってはいたけれど、どことなく悲しそうな目をしていた。

しばらくして、じっちゃんは急に、「紙飛行機の作り方、分かるか?」と聞いてきた。私は、「分かるよ」と答え、一緒に紙飛行機を作ることにした。じっちゃんの手はしわしわだけれど、腕は太くて、ごつごつしていた。じっちゃんは「紙飛行機を作るときに一番大切なのは翼なんだ」と言って、あっという間に紙飛行機を作ってしまった。私は、「じっちゃんの紙飛行機と私の紙飛行機で、どっちが遠くまで飛ぶか競争しよう」と言った。

外に出ると、その場ですぐに寝転がりたくなるほどの、気持ちの良い青空だった。私とじっちゃんは、「せーの」と声を掛け、同時に紙飛行機を飛ばした。思いっきり腕を振って投げた私の紙飛行機は、二メートルも飛ばないうちに落ちてしまった。でも、じっちゃんの紙飛行機は、緑の草の上をゆっくりと泳ぐように飛んでいた。落ちそうになるとふわっと浮かぶ様子は、まるでシーソーで遊んでいるようだった。じっちゃんに、「どうしてそんなに飛ぶの？」と聞くと、じっちゃんは、「風を感じて、遠くの人に手紙を届けるように放るんだ。力まかせに投げても、紙飛行機は絶対に飛ばないんだよ。」と教えてくれた。

じっちゃんは、明治・大正・昭和・平成という四つの時代を駆け抜けてきた。戦争も経験しているし、家族みんなが満足に食べられない時代も経験している。じっちゃんが遠くに飛ぶ紙飛行機を作れるのも、ビデオ録画ができるのも、きっと、どんなときでも前向きに、一生懸命頑張って生きてきた人だったからだと思う。こんなに長い間元気でいられるじっちゃんを、私は誇りに思っている。

三年後、百歳になったじっちゃんは病気になって、病院のベッドで寝たきりになった。私も中学生になり、部活動が忙しくなって、なかなかじっちゃんのお見舞いに行けなくなった。でも、時々病院に行くと、じっちゃんは必ず私と握手した。病気のせいか、腕も細くなり、手はむくんでいたけれど、握った手のひらはごつごつしていて、やっぱりじっちゃんの手だった。私が出た吹奏楽コンクールの新聞を持っていくと、じっちゃんはもう見えなくなった目を大きく開けて、しっかり新聞を見てにっこり笑ってくれた。

じっちゃんが亡くなって、お墓に入った後、私はじっちゃんの言葉の意味を考えるようになった。あの時、私は戦争のことを聞いたのに、どうしてじっちゃんは紙飛行機の作り方を教えてくれたのだろうか。

私はこう思う。きっとじっちゃんは、戦争で戦うような飛行機を作りたくて、整備士になったわけではないのだ。もっと自由に空を飛ぶ飛行機を作りたかったのだ。でも、戦争は、そんなじっちゃんの夢を許してはくれなかった。じっちゃんは、「風を感じて、遠くの人に手紙を届けるように放れ」と言った。逆風の中、力まかせに行動したって、結局なにも解決しないのだ。自分を支えてくれる、大きな自然の力やささまざまな人の愛情を感じ、感謝し、その思いを誰かに伝えてあげれば良い。

私は、じっちゃんから教わった紙飛行機を飛ばそう。届け、届け。あの空の向こうまで。